

大腸癌研究会プロジェクト研究
『肛門管癌の病態解明と Staging に関する研究』
第 14 回会議議事録

《日時》2024 年 7 月 11 日（木）13:00-14:00

《会場》名古屋コンベンションホール 3F メインホール

※会場と Web のハイブリッド形式

《出席者》

委員長：山田一隆

委員：阿部真也（東京大学）、井口健太（神奈川県立がんセンター）、石田文生（昭和大学横浜市北部病院）、石山泰寛（埼玉医科大学国際医療センター）、井田在香（神奈川県立がんセンター）、伊藤芳紀（昭和大学）、上田和毅（近畿大学）、碓井彰大（帝京大ちば総合医療センター）、江本成伸（東京大学）、大内彬弘（久留米大学）、大内晶（愛知県がんセンター）、大沼忍（東北大学）、岡本耕一（防衛医科大学校）、小川真平（東京女子医科大学）、落合淳志（東京理科大学）、小野智之（東海大学）、川村純一郎（近畿大学）、北口大地（国立がん研究センター東病院）、金城達也（琉球大学）、幸田圭史（帝京大ちば総合医療センター）、小嶋基寛（国立がん研究センター先端医療開発センター）、小杉千弘（帝京大ちば総合医療センター）、後藤健太郎（京都大学）、小松更一（東京大学）、小森康司（愛知県がんセンター）、坂本一博（順天堂大学）、坂本直也（国立がん研究センター先端医療開発センター）、佐藤美信（藤田医科大学）、澤田紘幸（杏林大学）、塩見明夫（静岡がんセンター）、島田安博（高知医療センター）、下池典広（京都大学）、須藤剛（山形県立中央病院）、曾田悠葵（防衛医科大学校）、高島淳生（国立がん研究センター中央病院）、高見澤康之（国立がん研究センター中央病院）、塚田祐一郎（国立がん研究センター東病院）、十朱美幸（順天堂大学）、富樫一智（福島県立医科大学会津医療センター）、所忠男（近畿大学）、豊島明（日本赤十字社医療センター）、鳥越貴行（産業医科大学）、中野大輔（都立駒込病院）、中原健太（昭和大学横浜市北部病院）、夏目壮一郎（都立駒込病院）、南角哲俊（帝京大学医学部附属溝口病院）、野澤宏彰（東京大学）、長谷川誠司（済生会横浜市南部病院）、馬場研二（鹿児島大学）、久田かほり（久留米大学）、肥田侯矢（京都大学）、深瀬正彦（山形県立中央病院）、前田耕太郎（藤田医科大学）、松山貴俊（埼玉医科大学総合医療センター）、虫明寛行（済生会横浜市南部病院）、村井伸（東京大学）、安岡宏展（愛知県がんセンター）、柳沢直恵（国立がん研究センター東病院）、山内慎一（東京医科歯科大学）、山口茂樹（東京女子医科大学）、山寺勝人（防衛医科大学校）、山本聖一郎（東海大学）、山本雄大（東京医科歯科大学）、結城敏志（北海道大学）、吉敷智和（杏林大学）、吉満政義（広島市民病院）（計 65 名）

オブザーバー：愛洲尚哉（聖路加国際病院）、新井富生（東京都健康長寿医療センター）、市原明子（宮崎大学）、恵木浩之（北里大学メディカルセンター）、大石琢磨（静岡がんセンター）、大木悠輔（愛媛大学）、大平学（千葉大学）、小澤真由美（横浜市立大学）、小野塚舞子（東京医科歯科大学）、加藤健志（大阪医療センター）、岸本光夫（京都市立大学）、佐村博範（浦添総合病院）、諏訪宏和（横須賀共済病院）、高山裕司（自治医科大学附属さいたま医療センター）、田中慶太郎（津市民病院）、中尾詠一（横浜市立市民病院）、橋本恭一（宇治徳洲会病院）、濱元宏喜（大阪医科薬科大学）、丸山聡（新潟がんセンター）、森永友紀子（京都府立医大）（計 21 名）

【敬称略、50 音順】

《会議内容》

I) 議題 1. 「肛門管癌の病態解明と Staging に関する研究」進捗状況について

(1) 第 13 回プロジェクト研究会議事について

委員長の山田より、第 13 回会議議事の確認を行った。

II) 議題 2. 論文化進捗状況について

(1) 各施設における論文化進捗状況について

当院研究分担医師の佐伯より、本プロジェクト研究において、代表施設からは4編の論文が雑誌に掲載され、1編が掲載予定であることが報告された。

また、共同研究施設による副次研究に関して、4題の論文化が報告された。また、論文化中の6題の進捗状況が各研究担当施設より報告され、1題が投稿準備中、1題が Revise 対応中、4題が執筆中であった。

(2) 共同研究施設からの副次研究成果に関する報告・討議

共同研究施設による副次研究に関して、現在論文化された4題について、各研究担当施設より論文の概要が報告された。

愛知県がんセンター消化器外科部 小森康司先生

Significance of Lateral Lymph Node Dissection in Squamous Cell Carcinoma of the Anal Canal.

Langenbeck's Archives of Surgery, 2024; 409(1): 157

肛門扁平上皮癌 (SCC) に対する手術治療における、側方郭清の意義に関して検討した。SCC における側方リンパ節転移陽性の危険因子は深達度であること、および術前診断で側方リンパ節陰性である症例に対する側方リンパ節郭清、すなわち予防的側方郭清は推奨されないことが、明らかとなったことが報告された。

国立がん研究センター東病院大腸外科 北口大地先生

Survival outcomes following salvage abdominoperineal resection for recurrent and persistent anal squamous cell carcinoma. European Journal of Surgical Oncology, 2023; 49(9): 106929

再発ならびに遺残病変に対する salvage APR の意義に関して検討した。

再発病変に対する salvage APR では、遺残病変に対する salvage APR より予後が有意に良好であった。また、再発病変では salvage APR を行った症例の予後が、行わなかった症例より有意に良好であり、salvage APR の効果が示された。しかし、遺残病変に対しては salvage APR を行った症例と行わなかった症例の予後に差はなかったことが報告された。

東京大学医学部腫瘍外科・血管外科 村井伸先生

Local excision versus radical surgery for anal squamous cell carcinoma –a multicenter study in Japan-. Int J Clin Oncol, 2024; 29(6):813-821

現在、NCCN ガイドラインでは肛門扁平上皮癌に対する local excision は、早期の肛門周囲皮膚病変にのみ推奨されている。より進行した癌に対しても、local excision は許容可能かを検討した。

cTis-2N0 病変に対しては、local excision を施行したとしても局所再発が多く、salvage 治療が可能であり、local excision は治療の選択肢として考慮される。ただし、筋層浸潤が再発リスクとなっており、筋層浸潤を認める場合には、密なサーベイランスや追加治療を検討する必要があることが報告された。

埼玉医科大学総合医療センター消化管・一般外科 松山貴俊先生

Clinicopathologic factors associated with prognosis in patients with metastatic squamous cell carcinoma of the anal canal: A multicenter cohort study. Journal of the Anus, Rectum and Colon, in press

現在の肛門管扁平上皮癌の遠隔転移症例に対する治療は全身化学療法であるが、その治療戦略はあまり標準化されていない。遠隔転移に対する治療成績と予後因子に関して検討した。同時性遠隔転移では複数臓器転移の方が単独臓器転移より予後不良であった。また、異時性遠隔転移では早期再発（18 ヶ月以内）が、独立した予後因子であったことが報告された。

本プロジェクト研究は次回開催で終了する予定であるため、副次研究を行っている施設に関しては、今年中に論文化をお願いしたい。

文責：山田 一隆